

フランツ・シューベルト「未完成交響曲」の謎

青山 俊一



図 1 フランツ・シューベ

フランツ・シューベルト（図1）の未完成交響曲は今日、完成された2つの楽章により、交響曲史上に燦然と輝く名曲中の名曲となっている。しかしこの曲が発見され、初演されたのはシューベルトが死去してから数十年も経ってからであった。この曲については第1、第2楽章だけで中断された理由が大きな謎とされている。

銀幕の時代のオーストリア映画「未完成交響」（図2：1933年）は、この謎をテーマにして伝記風に描いたもので、戦前の日本でも上映され、人気は高かった。この映画（フィクション）では、たそがれのウィーン風の巧みな映像表現で、シューベルトの悲恋が魅力的に描かれ、交響曲が未完成に終わる経緯も感動的である。

そのあらすじを紹介すると、『貧しい作曲家・シューベルトは上流階級のサロンでピアノ演奏を披露したのをきっかけに、貴族の令嬢（カロリーネ）の家庭教師になる。やがて2人は恋に落ちるが、身分の差は歴然としており、当然認められない。シューベルトは罷免されて、それから数カ月後、親の決めた相手に嫁ぐカロリーネの華やかな式場にシューベルトも招かれる。そこで「未完成」をピアノで弾き始めるが、第2楽章の終わりになるとカロリーネが慟哭の末に気を失い、運び出されてしまう。そこで取り残されたシューベルトが、譜面に「わが恋の成らざるが如く、この曲もまた終わるべし」と書き込む。』オーケストラによる「未完成交響曲」の演奏にも、この映画のような青春のロマンに満ちたものが多い。



図 2 映画「未完成交響曲」

カール・ベーム指揮のベルリンフィルの録音（1966年）はその代表的な名盤であり、『若々しく時には感傷的になりつつも、力強い足取りで青年（シューベルト）が運命を克服していくような、希望と憧れにあふれた演奏であり、最後は至福の時で締めくくられる。』これが多くの人がこの曲に抱くイメージであろう。

しかし、一方で全く異なる解釈もある。カール・シューリヒト指揮のウィーンフィルの録音（1956年）はその代表的なものであり、これは多くの苦勞の末に録音されたと伝えられる。この演奏に最初に接した時は、同じ「未完成」とは思えないほどであった。ここでは叙情的な雰囲気は容赦なく剥ぎ取られ、「迫りくる死への恐怖」、「寂寥感&絶望感」といった、普通の「未完成」のイメージとは正反対の解釈がなされている。

『冥界から響き出るかのような序奏主題の後、死への恐怖が足早に迫ってくる。青年の足取りは重く、希望の光は消え失せ、木管の語り口も言い知れぬ寂寥感に満ちている。全曲を通して、暗黒の淵を覗き込むような絶望感が容赦なく襲ってくるような、暗い戦慄的な表現が多いが、最後は彼岸でやっと安息を得たかのように、明るい光に包まれて終わる。』この「未成交響曲」が書かれたのは1824年であるが、その数年前にシューベルトは不治の病に冒されていることを既に悟っていた。シューベルトはこの過酷な運命に向き合い、孤独な死を覚悟しながらも、生きる意味とは何かを考え、その追求に作曲の筆が向かったとする考え方もある。シューリヒトの演奏は（共感できるかどうかは別にして）この解釈を見事に演奏で表現しており、第2楽章で終わった理由も、この演奏を聴けば納得できるのではないか。

「未完成」は謎に満ちており、このような対極的な解釈もあるが、それがこの曲を一層魅力的にしていると思われる。シューベルトは31歳の若さでこの世を去ったが、過酷な運命を覚悟し、それと向き合うことで、この至宝とも言うべき名曲が生まれたのであれば、誠に意義深いことと考える。(S.A.)